

Vent

音楽教育 ヴァン

vol. 60

巻頭インタビュー

平田オリザ（劇作家・演出家）

いま必要な芸術教育

〔創刊60号記念企画〕

60でつながるカルチャーの旅

——ロックとメディア、そして学び

レポート①

「自立した学習者」を育むために

～生徒がつくる授業「みがく」の実践～

豊川市立御津中学校

レポート②

令和7年度 全日本音楽教育研究会全国大会（総合大会）佐賀大会

第66回 九州音楽教育研究大会 佐賀県大会

第26回 佐賀県音楽教育研究大会 佐賀・小城・多久地区大会

参考楽譜

同声二部合唱『ありがとうの言葉にのせて』

（作詞・作曲：天野絵美）





Vent vol. 60に寄せて

“新しい音楽科教育の地平を切り拓いていく風となるように”という願いをこめて、2003年に創刊した『Vent（音楽教育ヴァン）』。音楽科教育の実践を、そして音楽そのものを「生きた言葉にして伝えたい」という熱意とともに始めました。

ここにいたるまで多くの方々に、取材へのご協力やご寄稿をいただきました。その一言一句にこめられた思いと向き合いながら駆け抜けてきた22年間でした。言葉と同じように、音楽にもその人の表現したい思いがこめられています。

「言葉は音楽である」という話を聞いたことがあります、まさに音楽を奏でるように、Ventは多くの方々の思いを届けてきたのだと、今、あらためて感じます。

そして、子どもたちが音楽を通してたくさんの新しい世界と出会う姿、誰もが生きていくなかのどこかで音楽と出会う姿を目にするたびに、幸せな気持ちを重ねてきました。

これまでご協力いただいたすべての方々と、読者の皆さま方に、心から深く感謝を申し上げます。これからもVentは生きた言葉を通じて多くの出会いを実現し、音楽の素晴らしさを発信してまいります。どうぞご期待ください。

教育芸術社 代表取締役社長 市川かおり

Contents

- 3 | 巻頭インタビュー
平田オリザ（劇作家・演出家）
- 8 | 授業者に訊く
會田利恵子（栃木県立足利高等学校 芸術科教諭）
- 13 | 「創刊60号記念企画」
60でつながるカルチャーの旅
——ロックとメディア、そして学び
（北中正和／泉 麻人／齊藤忠彦）
- 22 | レポート①
「自立した学習者」を育むために ～生徒がつくる授業「みがく」の実践～
豊川市立御津中学校
- 26 | レポート②
令和7年度 全日本音楽教育研究会全国大会（総合大会）佐賀大会
第66回 九州音楽教育研究大会 佐賀県大会
第26回 佐賀県音楽教育研究大会 佐賀・小城・多久地区大会
- 30 | Kyogei Presents
音楽診断
[第25回] 歌舞伎編（監修・解説：配川美加）
- 32 | Information
- 34 | 参考楽譜
同声二部合唱『ありがとうの言葉にのせて』（作詞・作曲：天野絵美）
- 38 | エッセイ
新・音から広がる世界〔第20回〕藤原道山

*本誌に記載されている職名は令和7年12月現在のものです。

いま必要な芸術教育

巻頭
インタビュー

Orion
Interview

劇作家・演出家

平田オリザ

聞き手

ヴァン編集部

今号の巻頭インタビューでは、「対話的な学び」について再考します。平田オリザ先生は、劇作家・演出家として世界的に活躍される傍ら、演劇を通してコミュニケーション能力を育む、対話型の教育実践にもご尽力されています。AIが台頭する今、自分の力で考え発想し、どう表現していくかが子どもたちにも求められています。そのような中で芸術教科が担う役割について、さまざまに語っていただきました。

「会話」ではない「対話」

Vent (以下、V)：あらためて、平田オリザ先生がお考えになる「対話」とはどのようなものでしょうか。

平田：ご承知のように、文科省が主体的・対話的で深い学びを平成29年度から始まった今期の学習指導要領で打ち出して以来、対話型の教育が強く言われるようになりましたが、一方で、「対話」という言葉の定義が非常に曖昧なために、現場が混乱してしまっているのが実態です。私が30年ほど前から述べてきたのは「会話」と「対話」をきちんと区別すること。英語では“Conversation”と“Dialog”のように、はっきりとした違いがあるのですが、“Dialog”を「対話、対の話」と訳してしまったために、日本語の辞書を引いても「向かい合って話すこと、一対一のコミュニケーション」などと「会話」との差が有耶無耶に表現されています。私なりの定義では、「会話」とは親しい人同士のおしゃべり。「対話」とは異なる価値観をもった人との価値のすり合わせであり、価値観が似た者同士でも、何か共同体の中で非日常的なことが起こり、価値観をすり合わせないといけない場合に、対話が起これと位置付けてきました。ここが分かっていないと、相互の話し合いという名の会話をすれば対話的、という勘違いに陥ってしまうのです。

V：対話的という言葉が一人歩きして、子どもたちの実感が伴わない、なんとなくの言語活動になっている可能性はあるかもしれません。

平田：ただ、日本社会は基本的には均質性の高い社会を築いてきたので、自然状態では、子どもたちの間に対話が起これにくいのです。特に今は全国的にも小規模校が多く、1学年1学級で、幼稚園・保育園からずっと同じ集団の中で過ごすということも珍しくありません。だから、発言する子、



しない子など役割分担が全て固定されていて、みんな優しいし暗黙のうちに理解している。そういう場では価値観をすり合わせるような事態は起きないんです。その子たちが一生そのコミュニティの外に出ないで済むのなら、主体的・対話的で深い学びは要らないかもしれない。でもそうはいかないですよ。多くの子どもが18歳で地元を離れ、国際社会にも出ていく。自ら出ていかななくても、多くの産業で外国人労働者がいないと成り立たない世の中になっています。だからこそ異なる価値観や文化的な背景をもった人とどうにかしてうまくやっていく能力が必要なんです。ただ、学校はまだ非常に均質性の高い文化、教室が形成されているので、そこでは意図的に対話を仕掛けるような授業が必要ではないかと、今期の学習指導要領になって以降、私が特に述べてきたところです。

V：音楽科で対話的と言うと、とかくグループ討論に力を注いでしまう傾向もあるようです。

平田：言葉を使わなくても対話的にすることはできます。しかし、音楽の最大の課題は、ハーモニーに音楽的価値があるということです。ハーモニーは協調性、一致団結を求めますが、対話型の教育で求められるのは協力して働く力「協働性」です。協働性はバラバラな個人がバラバラなままで、うまく折り合いをつけてやっていくことなので、それを音楽教育でどう実現できるか。一方で音楽は教科間連携にすごく強みを発揮する科目なので、多少我田引水になりますが、演劇的な要素を取り入れたり、他教科の中に音楽を入れたりすることがおすすめです。

場を共有すること

V：学長を務めておられる芸術文化観光専門職大学でも、演劇を通したコミュニケーション教育に取り組まれているのですか？

平田：はい、特に1年生は全員が必修で、コミュニケーション演習という科目の中で演劇をやります。演劇的手法を使って、コミュニケーション能力やチームビルディングなどを学んでもらいます。本校はコロナ禍に開校し嵐の中の船出となりましたが、おかげさまで5年目に入り、4年間で47都道府県全てから学生が来ています。倍率も4倍ほどをキープしており、学んできたことを少しでも生かしながら地域貢献したいという学生が非常に多いですね。

V：コロナ禍ではコミュニケーションの在り方が多様化し、複雑さを増した部分もあるかと思います。教育機関におけ

「対話型の教育で求められるのは「協働性」です。身体性や類推、推論の力、言語能力などがとても大事で、そうした感性を養えるのは実は芸術からなんです。」

る変化をどう感じていますか？

平田：コロナ禍の全国一斉休校措置によって、タブレットの支給が早まり、反転授業が加速しました。今では授業中に生徒が検索したり、生成AIを活用したりすることも当たり前になってきています。そうすると、学校の先生は大変ですよ。こちらが教えなくても生徒は答えを知っているのですから。だからこそ、学校では学校でしかできないことをやるべきだと私は思っていて、これは個別最適化と協働性として文科省も推し進めていることです。つまり、一人一人の学びはインターネットを通じてもできることがたくさんあるのでそこは任せて、学校では学校でしかできない協働的な学びをという方向性が強まった。コロナ禍でそうした学校の在り方が明らかになりましたね。

V：芸術教科において、学校ならではのところをどのように見出せばよいでしょうか？

平田：一つは、他者理解です。異なる文化的背景をもつ他者を理解することは理屈だけでは難しいのですが、芸術を介すことで違いに共感することができます。例えば諸外国の音楽を授業で聴くことによって、こんなに違う音楽なのに私たちはどうして共感できるのだろうと考えることが大切で、おそらくこれからの音楽教育の大きな役割の一つになると思います。次に大切なのが、場を共有すること。これだけサブスクが浸透していても、よい映画があるとみんな映画館に

行き、感想を語り合いますよね。これは芸術の一つの力でもあります。一緒に観るという行為は、人類が何万年も前からずっと行ってきた、ある種DNAに染み込んだ行為なので、お葬式がなくなるのと同じように、この先もなくならないと思います。デジタル化の時代には、そうした場の共有が共同体を維持するために、ますます必要になってくるでしょうね。

文化的体験が養う「モテ」の能力

V：講演された令和7年の近畿音楽教育研究大会では、対話型の教育に加えて、文化的体験の重要性についても語られていました。この文化的体験が子どもたちにもたらす影響について教えてください。

平田：文化的体験は子どもたちの非認知スキルと大きく関わっています。この非認知スキルは、だいたい幼保から小学校低学年ぐらいまでに最も伸びると言われている能力ですが、さまざまな体験を通じてしか養うことができません。また、体験時に得られたリズム感や身体能力が複雑に結び付いて学びにつながっていることが最近の教育統計で明らかになり、複合的な体験の重要性を表しています。

V：感性を磨く実践が生きた能力を育むのですね。



取材は2025年11月19日、兵庫県公立大学法人 芸術文化観光専門職大学で行われた

平田：この文化的体験というのは鑑賞も含まれます。劇場やコンサートホール、美術館、科学館などに低学年のうちから連れて行っている家庭とそうでない家庭では、小学校6年生での学力テストで差がついてしまうという統計が出ています。これは同じ所得層でも優位な差が付くことから、私は文化格差と呼んでいます。要するに、子どもの好奇心を育てることが重要で、それは習い事からではなく実は鑑賞などからの影響のほうが大きいと考えています。

V：中・高生以上においてはいかがでしょうか？

平田：文化的体験がさらに積み重なる10代においては、個人の身体に内面化された教養やセンスとの関わりが出てきます。社会学的用語では身体的文化資本と呼ばれる能力ですが、簡単に言ってしまうと、「モテ」の能力です。私がよく学生に説明するのは、ワインのうんちくを語るやつはモテないよねって話です（笑）。実際にモテるのは、寂しそうにしている子に「今日、このワイン飲んでみたら？ おすすめなんだけど」とさりげなく言える人。これが身体的文化資本です。音楽も一緒に、音楽のうんちくを語れる人よりも、相手の気持ちをくみ取ってそっと曲をかけられる人がモテる。このセンスは音楽の多様な経験からしか生まれないんです。音楽を使ってどうすればモテるかを考えるという授業もおもしろいかもしれませんね（笑）。

身体に落とし込む表現

V：劇作家としての立場から、表現することへの思いについ

て、お伺いできますか？

平田：演劇における表現は必ず言語に関わります。言語はコミュニケーションの中核であり、言語運用能力は何においても大事になっていきます。一般的に私たちは言語化できないと、伝えるすべを失ってしまう。特に子どもの場合には、そうしたときに先に手が出てしまうのです。だから自分の気持ちを相手に伝えるための表現というのはとても大事だと思っています。ただ言語表現は家庭環境の影響も受けやすいですし、苦手な子もいるので、それを補うものは音楽でも絵でもよくて、自分の気持ちを表せる何か回路があれば、救われる子が相当増えるはずです。

V：演劇の世界でも自己を表現することが大事なのでしょうか？

平田：そうですね。これまでは、演劇を含む芸術教科は情操教育と言われ、心を豊かにすることなどが重要視されてきました。アーティストである私にとってはそれも大事なことと思っていますが、最近は合意形成能力や他者理解、そして単なる表現ではなく相手に伝えるための自己表現に、より関心が集まっている気がしますね。あとは、先ほど述べた「場の共有」という、みんなで一緒に何かしたり、観たり聴いたりすることで得られる共感覚もそうですね。

V：共感覚は、自分ごとのように感じられるということでしょうか？

平田：自分ごとというよりは「身体性」、身体に落とし込めるかどうかが大きいですね。言語学では記号接地問題と言われるもので、例えば「 $1/2$ と $1/3$ ではどちらが大きいか」という問いに対する小学校高学年の正答率は低いのですが、「1つのケーキを半分に分けるのと、3人で分けるのでは、1人当たりの取り分はどちらが多い？」と聞くと多くの子が答えられる。それは接地している、つまり身体につながっているからです。ただ、もちろん抽象的なものも学んでいく必要があるので、どうやって教えるかが問われるのですが、ここでは何か身体性をもっていることが大事になるので、身体性の強い音楽や美術、演劇が教科間連携で大きな役割を果たすわけです。

芸術教科が担う未来

V：デジタルやAIが台頭する時代の学習指導要領改訂ということで、学校教育も大きく変わるタイミングだと思いますが、こうした状況をどう思われますか？

平田：重ねてになりますが、教科としての軸と他教科との

連携を整理したほうが、日本の教育ではよいと思っています。兵庫県豊岡市で演劇的手法を使ったコミュニケーション教育を始めて9年目になりますが、あきらかに子どもたちの対話力や自己効力感が伸びています。データの的にも、話し合いが好きという子どもが全国平均を上回るようになりました。しかし、変わったのは子どもたちではなく教員です。だって、1学期に1回ずつの演習しかしていないのですから。ただ、それを通じて先生方があらゆる授業をアクティブラーニング化しようと努力し、普段の学級経営でも人の発言を笑わず、バラバラな意見に対しディベートではなく、ただ受け入れるのでもなく、どうにかして折り合いをつける手法を取り入れるようになったことで、変化が生まれたのです。先生方が教育観や学校観を変えられるかどうかが問われているのだと思います。若い先生は順応性が高いのですが、学校の裁量権も増えている中で、管理職の先生がそういうことに柔軟だと大きく変わりますね。

V：今までとは違うということを現場の先生だけでなく、管理職の世代も相当意識しないといけないという事態になっていますね。

平田：変わらなきゃいけないと思うし、変わりたいとも思っているけど、それが言語化できなかったり、なぜという結び付きが弱かったり、腑に落ちないところがあるのかもしれませんが。最近は芸術教科の重要性を示す教育統計も出てきているので、まずはその事実を受け止めていただくことだと思います。

V：日本では教科書のデジタル化が進む一方で、諸外国ではアナログに戻すという流れもありますが、動向を俯瞰されてお考えになることはありますか？

平田：学校教育とは別ですが、単純なエビデンスがあって、親の蔵書と子どもの学力は相関性がものすごく高いという結果が出ています。読書自体はデジタルでも可能ですが、親の蔵書は見た目の多さによるものなので、デジタルではダメなんです。おそらくこの相関性は、あと50年は変わらないでしょう。だから、デジタルのよさと従来の「もの」のよさをどう組み合わせていくかということですよ。特に音楽の場合では、タブレットをうまく利用すれば、作曲など子どもたちと一緒にできて共有もしやすいですから、そういうところにはどんどん使えばいいと思います。一方で生の部分、共感覚をどう連動させていくかも考える必要があります。

V：過渡期の教育現場で奮闘されている先生方にメッセージをお願いします。

平田：昨今、子どもたちの学力や読解力の低下が取り沙汰されています。実態が多様化していることは間違いないで

すが、急速な学力低下といった事実は全くないんです。一部のデータを取り上げて「教科書が読めない」などと目を引く言葉が世の中に出回っているだけのことです。昔も今も分からないことは同じで、ただ、子どもがどこでつまずくか、そしてそのつまずく理由が一人一人異なることが明らかになり、限られた授業の中での対策が難しいことまで見えてきました。だから、学力低下を抑えるためには、子ども一人一人に寄り添って、個々人のつまずきを潰してあげる必要があります、そのためには教員の数を増やすしかないんです。最初のつまずきは9歳の壁と言われる、分数や割り算が出てきたときです。そのときに身体性や類推、推論の力、言語能力などがとても大事で、そうした感性を養えるのは実は芸術からなんです。だからこそ、幼保から小学校低学年は専科の先生が徹底的に音楽や演劇、芸術教科に取り組んで好奇心を育て、だんだん抽象度を増した勉強に進んでいくという流れになるといいなと思います。



● 平田オリザ（ひらた・おりざ）

劇作家・演出家・劇団青年団主宰。芸術文化観光専門職大学学長。青森県立美術館館長。江原河畔劇場館長。豊岡演劇祭フェスティバル・ディレクター。1962年東京生まれ。国際基督教大学教養学部卒業。1995年『東京ノート』で第39回岸田國士戯曲賞受賞。1998年『月の岬』で第5回読売演劇大賞優秀演出家賞、最優秀作品賞受賞。2002年『上野動物園再々々襲撃』（脚本・構成・演出）で第9回読売演劇大賞優秀作品賞受賞。2002年『芸術立国論』（集英社新書）で、AICT評論家賞受賞。2003年『その河をこえて、五月』（2002年日韓国民交流記念事業）で、第2回朝日舞台芸術賞グランプリ受賞。2006年モンブラン国際文化賞受賞。2011年フランス文化通信省より芸術文化勲章シュヴァリエ受勲。2019年『日本文学盛衰史』で第22回鶴屋南北戯曲賞受賞。



授業の始まりに『Plymouth Rock』のおさらい

Ask the teacher

授業者に訊く

栃木県立足利高等学校



會田利恵子先生（授業者・左）と新井恵美先生（聞き手・右）

今回の「授業者に訊く」でご紹介するのは、栃木県立足利高等学校1年生がグループで取り組む、ボディーパーカッションと二部合唱の授業です。対談では、主体的な活動における自主的な“気付き”の大切さと、それを引き出すための教員側の姿勢について伺いました。

授業者：會田利恵子^{あいだ}（栃木県立足利高等学校 芸術科教諭）

聞き手：新井恵美（宇都宮大学 准教授）

本時の授業の位置付け

題 材：「アンサンブル活動を通して仲間と協働しながら音楽表現に取り組もう」
教 材：1時間目『Plymouth Rock』2時間目「校歌二部合唱」（2時間続き）
ねらい：生徒たちが主体的・協働的に、アンサンブル活動を行うことを目的としています。『Plymouth Rock』と「校歌二部合唱」を教材に、生徒たちがグループを組み、譜読みから教え合います。よいアンサンブルとはどういうものか自ら考え、教え合いながら取り組み、学び合う過程を大切にしています。計5回のグループ活動後、発表会をします。2曲とも暗譜をし、発表時には生徒たちにも評価をさせます。また、生徒には毎時間こまめにシートを書く時間を設け、活動を言語化させています。冒頭、中間、最後に活動によって得た成果を記入させ、次の目標を明確にさせる、その繰り返しをすることで成果を生徒たちに感じさせる工夫をしています。

授業の流れ

学習の内容・学習活動	
導入(8分)	○最初に全体で演奏し、練習前の状態を確認、ワークシートに記入。グループで共有し、本時の目標を決める。
展開①(15分)	○グループ活動。目標をもとに練習をする。
(5分)	○中間報告をワークシートに記入。後半の目標を決める。
展開②(15分)	○グループ活動。目標をもとに練習をする。
まとめ(7分)	○本日の成果をまとめ、次週の目標を決める。

生徒への信頼が、主体性につながる

主体的学習で生まれる“気付き”

新井：今日のようなグループでの活動というのは、今回の題材以外にも取り組まれていますか？

會田：1学期は楽譜の読み方を学びつつ、小さなグループをつかって自分たちで楽譜を読み進めながら、簡単なリズム・アンサンブルの発表を行いました。その後に『Clap Tap with CUPS』のリズム・パターンを自分たちでつくって発表し、今回のボディーパーカッション演奏を経て、3学期には創作を行う予定です。1年間のスパンの中で読譜力を付けさせたいという目的があるので、リズムを読む、楽譜を読む、ある程度書くこともできる、創作することができるという流れを、年間で組んでいます。

新井：今日の授業では、生徒一人一人が、事前、中間、事後と自己評価していく中で、ワークシートにまとめるこ

とによって1時間での変容がよく見られたと思います。振り返ったことをもとに、練習の仕方もどんどん変わっていて、よりよいものにしようという意識が見えたのが印象的です。

會田：時間を区切って、その中で練習することが重要なポイントだと思っています。ただひたすら練習をしているだけだと、どんなに優秀な子でも飽きてしまうので、変化を付けながら練習時間を設けます。その中では言語化することも重要で、「書いたことをもとに評価するよ。みんなが頭の中で思っていたことは、先生は分からないよ。」と伝えています。そして書く時間もしっかり区切ることで、活動の成果が出る。最初のうちは難しいと思います。温まってくるまでに時間がかかる子たちもいると思うので、同じことを繰り返しながら、生徒たちが動き出すまで教員が根気強く待つことが大事。すると、徐々に徐々にできるようになってきます。

新井：ワークシートを書くにあたって、



限られた時間でワークシートを記入する

前時のものを返却していますよね。それも見ながら、自分の中でどう変容してきているのかを確認して書いている生徒もいました。

會田：1時間目はメモとしてはスカスカですね。それがだんだんと濃くなっていく。思考・判断・表現の部分と、主体的に取り組んだかという部分をマーカーで色分けしてから返却しているので、色が増えていく楽しさもあると思います。毎時間、自分はこんなに成果が上がったのだと、見てすぐに分かるようにすることが効果的です。

新井：だからこそ、毎回同じ形のワークシートを使っているのですね。

會田：そうですね。あえて変えない。そしてあえて教員はいろいろ書かない。限られた時間の中で、生徒のメモが変わっていくことがいちばん大切です。それは協働的な活動にも大きく影響します。私はただ生徒たちが練習しているのを見ているだけのことがほとんどなので、生徒同士で課題を見付けて教え合っています。隣の班は何をやっているんだろう、というのも生徒は見ていますね。先ほど、こちらからは言わなくても、自分たちで自然と立ち上がって練習している班がありましたよね。それを見た他のグループは、同じように立ち上がって見たところで時間が来



立ち上がって演奏している生徒たちの様子



○會田利恵子(あいだ・りえこ)
栃木県立足利高等学校 芸術科教諭

てしまったのですが、それでいいと思うんです。その残念感が、じゃあ次は立って練習するところから始めようね、とつながっていく。授業、そして学期の中での活動、全ての学びにつながりをもたせていくことは、我々の永遠のテーマですよ。

新井：そうですね。生徒たちの学びが繋がっていることは、ものすごく感じました。立ち上がって練習してみて、分かったことがあったみたいですね。膝を思ったよりも上げなきゃいけない、足のほうが思いのほか合わせにくくて、難しいとワークシートに書いている生徒がいました。授業の冒頭で會田先生が、「手は合うけど、足は合っていないよ。それはどうしてだろう？」と投げかけていらっしやいましたね。それで生徒は足を意識したからこそ、立ってやってみると難しさを感じて、それが

今度は次の時間の学びへつながっていくのだと思いました。

會田：「足が合っていないよ、それはね」と理由を教えてしまうのは簡単なのですが、ただ、それだけだとつまらない。初めは音を聴いて合わせていたのが、今度はビジュアル的にそろっているかを意識して、じゃあ自分ももしかして手を上げたほうがいい？とか、足もただ楽譜を見て左右左右ってやるだけじゃなく、音を変えてみようとか、自分たちが気付きが生まれるといいですよ。

新井：こういうふうにしてみたらどうかなって教えれば、生徒はその通りにやります。だけど、それをあえて先生は我慢しているんだろうなと思いました。先ほど、強弱を工夫しようと、*p*のときには手に空洞をつくらないでたき、*f*になったら少し空洞をつくってたくとワークシートに書いている生徒がいましたが、みんなで相談しながら試行錯誤して、それぞれが自ら学んで習得していく姿が見えました。



ワークシートの書き方についてヒントを示す會田先生

大成功の学びとは

新井：日頃から會田先生が授業で大切にされていることは何でしょうか？

會田：生徒の気付きのために、「意識」をもたせ、「チャンス」を与えることが大事だと思っています。本校には、自分自身への評価が厳しい生徒もいれば、そうでない生徒、さまざまな生徒がいて、大勢でただ一緒に活動するだけでは伸びないと思います。だから生徒たちにチャンスを与える。たとえば教員側から見て、十分にできていると思えないような状況だとしても、その生徒はものすごく頑張っているかもしれない。だからできなくてもいいから発表させると、伸びるチャンスが生まれます。これを実現するには、いかに教員が目標をもつかということも大事ですよ。生徒はこういうふうになるだろうと思い描きながら実践してみて、その結果生徒によってその振りが大きくても小さくても、どちらも成功と考えてよいのではないのでしょうか。

新井：チャンスというと、ワークシー



自分のパートを繰り返し歌う様子

トを書いているときに、書き方のヒントを示すため、先生は板書されましたよね。それによって、自分の頭の中の考えを表出するチャンスを先生が与えてくださったと思いました。実際、ワークシートの書き方が目に見えて変わっていましたね。だからといって、板書の文言をそのまま当てはめているわけではない。今考えていることや自分の気付いたことを自分なりの言葉で表していこうという意識が、先生の声かけで高まったと思いました。自分の表現を振り返るということについても深まりがありましたね。

會田：適切な声かけて難しいですよ



各グループで二部合唱の練習

ね。余計なこと言っちゃったなと思うことがあっても、余計でない場合もある。やっぱりその瞬間瞬間の生徒たちの心の動きによるんですよね。本当にここは我慢しなくてはいけない、ということもあれば、声かけをして、そのときは生徒たちに響かなかったけれども、将来的にどこかの瞬間で響いたということもある。「あのとき先生がこう言っていたけれども、もしかしてこのことかもしれない」というふうに。それは音楽の時間じゃなくても、生徒がどこかで思い出してくれれば、我々の教育としては大成功です。

新井：それはいちばん目指したいところですよ。2時間目に歌っていた校歌もすごく難しい音運びの合唱曲でしたね。それを一生懸命聴いて、チャレンジして、合わせていっている生徒の姿に感銘を受けました。

會田：分からない状態から始めることが効果的だと思っているので、基本的に自分たちで音取りをしてもらっています。もちろん、最初は私も一緒に音取りをするのですが、10のうち3割ぐ

らいまでにします。あとの7割は生徒たちでできるので、目標は高くもって、任せようとしています。ハモリを取るのが難しい曲なので、今日は「どうしても分かりません」という生徒がいました。特別大サービスでメロディーを教えたら、一人が、「下のメロディー、綺麗じゃない？」と言ったんです。それによって、そのように意識をしていなかった子たちが、「もしかしてこの音、綺麗かも？じゃあ歌うか」という気持ちになる。それが協働的な学びですが、こうして瞬間的に出てくるか否かは、こちらとしては賭けです。最終的に発表でうまく歌えなかったとしても、そうした気付きがあれば、生徒たちが音楽というものに対して活性化できたということになるので、大成功の学びなんだらうと思います。



○新井恵美(あらい・えみ)
宇都宮大学 准教授

音楽科の本質

新井：お話を伺って、生徒たちがスムーズに読譜できている理由がよく分かりました。今後の創作の授業では、こういった活動をされるのですか？

會田：こうして読譜の練習を重ねてきたので、3学期には、18時の下校チャイムをつくります。出来上がった曲はつくった翌年に月替わりで流していて、現在は今の2年生たちが楽しみに聴いているんですね。そうやって生徒たちがつくったものを全校生徒も巻き込みながら発表して、1年間のまとめとなります。

新井：全部の学びがつながっているのは、先生が芸術科・音楽Ⅰの目標をきちんと把握しているからこそ。そうして目指すべきところを大事にしていってほしいというのが、とても素晴らしいですね。

會田：それで生徒たちの学びが向上していけば何よりです。正直なところを言うと、本当はオペラなども全部見せる時間が欲しいんですけどね。でも今の形だと、時間が足りない。感じたこと気付いたことを書くとか、そういう



音を確かめながら練習する生徒

ことではなく、言葉に表せないぐらいの感動をして欲しいと、音楽の教員としてはそういう気持ちがあります。

新井：結局、言葉で表現できないものがあるからこそ、音楽であるのだと思うので、やっぱりそこを伝えたいですね。

會田：伝えたいですね。ほんとうはそ

れがやってみたいです。

新井：それこそが音楽の究極かなと思います。

會田：今の授業のパターンももちろん学びはあるけれども、時間をじっくりとかけて、生徒が自分だけの、自分の心と対話するだけでいい、という音楽も必要なのだらうと思います。

校長先生より

本校は進学に重点を置く普通科単位制を採用しています。音楽科では、音楽理論や演奏研究、ソルフェージュなど選択科目が充実しており、さまざまな進路に対応している進学校として、子どもたちの選択肢が広がるような取り組みを続けています。

教育理念として掲げているのが、「進取」「忠恕」「自学」です。「進取」は足利が織物産業で栄えた時代、名士たちが斬新なアイデアを取り入れて、一時代を築いていたことに由来しています。「忠恕」は儒学の孔子の言葉から、他人に対して真心と思いやりをもって行動ができる人間になってほしいという願いが込められています。「自学」は足利学校の言葉で、自ら課題を見だし主体的に学ぶことです。本校が令和4年に統合をした際、新たな出発としてこれらが制定されました。

合唱の専門家である會田先生は、生徒のことを考えながら、校舎の環境を最大限に生かした指導をされていていらっしゃいます。顧問を務める合唱部は関東大会に出場し、今年度は金賞を受賞しました。



宇都木修一 先生
栃木県立足利高等学校
校長

The Beatles × Vent



〔 創刊60号記念企画 〕

60でつながるカルチャーの旅 —ロックとメディア、そして学び—

2026年はビートルズ来日60周年にあたります。

そしてヴァンは今回で創刊60号を迎えました。本企画は、この“60”という数字の洒落から生まれました。音楽評論家の北中正和さんによる「1966年以降のロック(主に洋楽を中心としたポピュラー音楽)の変遷」で始まり、コラムニストの泉麻人さんには、1966年頃から現在に至るまでの「日本社会における大衆文化」を、人々が親しんできた視聴覚文化に触れながら語っていただきます。

さらにこの2つのコラムを受けて、信州大学教授の齊藤忠彦先生に、ポピュラー音楽が教育の世界にどのような影響を与えてきたかについて考察していただきました。

学習指導要領に示されている「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる」ことの意義をあらためて考える契機となれば幸いです。

ロック通史60年

音楽評論家 北中正和

ビートルズ来日から現代に至るまでのロックは、どのような変遷をたどったのか。
各時代の音楽的特徴を中心に、音楽評論家の北中正和さんに語っていただきました。

[序章] 1966 年以前 ～ロックンロールの誕生

20世紀前半のアメリカでは、ブロードウェイ・ミュージカルの挿入歌やジャズのヒット曲など、現在ではスタンダードといわれている音楽を、クラシックと区別して「ポピュラー」あるいはそれを短縮して「ポップ」と呼んでいました。ジャンルの境界線はゆるやかで、どちらかというと大人向け、あるいは家族全員で楽しめるような音楽が主流でした。

それに対して1950年代には、ビル・ヘイリーの『ロック・アラウンド・ザ・クロック』（1954年）やエルヴィス・プレスリーの『ハートブレイク・ホテル』（1956年）のように若者向けの音楽が登場してきて、「ロックンロール」と名付けられました。それはジャズから派生した踊りやすい黒人音楽「リズム＆ブルース（R&B）」とアメリカ南部の白人音楽「カントリー」の要素がミックスされたもので、後に「ロック」と呼ばれる音楽です。電気楽器を使ったその〈うるさい〉音や過激なパフォーマンスに、大人たちは眉をひそめました。それは人種差別が激しかった当時、白人の若者が人種の壁を越えて、黒人風の音楽に熱中することへの当惑もあったからでしょう。「ロックンロール」を〈不良のわいせつな音楽〉と言う人も少なくありませんでした。実際、50年代末から一時的にブームが退潮して、マイルドなヒット曲に取って代わられたことがあります。しかし「ロックンロール」は形を変えながら60年代以降のポピュラー音楽を牽引する音楽になっていきました。

ビートルズの来日とロックサウンドの変化

ビートルズは1950年代のロックンロールの影響を受けて、イギリスのリヴァプールというポピュラー音楽にとっては辺境の地から出てきました。彼らは60年代初頭のマイルドな音楽の流行を意に介さず、初期のロックンロールがもっていたエネルギーにイギリス的な視点を加え、独自の音楽をつくって、64年以降世界的な人気を集め続けました。エレキ・ギターの〈うるさい〉サウンドや、それに絶叫する少女たち、モップ頭と呼ばれた長髪が当時の社会常識からは異端で反社会的に見えたのでしょう。66年の来日時には、混乱を恐れて警察が大規模な警備態勢を敷き、生徒がコンサートへ行く

ことを禁止した学校もありました。

しかし来日公演から数ヶ月後にコンサート活動から退いたビートルズは、さらに斬新な音楽をつくりはじめました。彼らはスタジオ技術を駆使し、クラシック音楽、現代音楽、インド古典音楽など、さまざまな要素を動員して、前例のない音楽を組み立てていきました。それまでのレコーディングは、〈演奏をよく録音してよく再現する〉ことに重点が置かれていましたが、彼らは〈生演奏の再現にこだわらず、多重録音を駆使して音楽をつくる〉ことへと、レコーディングの概念を拡張させていったのです。

新しい音楽は〈辺境〉から生まれる

時代を変えるようなポピュラー音楽の潮流は、〈辺境〉から生まれることが少なくありません。例えば、1950年代のアメリカは、ニューヨークやロサンゼルスが音楽の最先端をいく二大中心地で、エルヴィス・プレスリーを最初に発掘した南部テネシー州メンフィスのサン・レコードは、ニューヨークやロサンゼルスからすると〈辺境〉の小さなインディーズでした。50年代までのイギリスでも、音楽の中心地ロンドン以外は田舎とされていました。逆に言うと、だからこそリヴァプールで好きな音楽を追求してきたビートルズは、都会の流行に左右されない二番煎じではない音楽をつくれたわけです。彼らは人気が出た60年代中期以降、文化の中心地ロンドンに拠点を移しましたが、それでも既成概念にとらわれない音楽をつくり続けました。〈空気を読まない〉彼らの反骨精神は、リヴァプール時代に培われたものだと思います。

ミネソタ州からニューヨークに出てきて、時代錯誤な田舎風の声による詩的なギター弾き語りフォークで注目されたボブ・ディランもまた〈辺境〉から登場したと言えるでしょう。彼は「フォークのプリンス」として認められた後も、フォークでは異端のエレキ・ギターを手にしてロックの可能性を広げていきました。

ロック史上重要な R&B とロックンロールとは？

ブルースやジャズ特有のブルーノートと呼ばれる音階、ゴ



1985年に発売された『We Are the World』は、アメリカの人気スターがジャンルの壁を越えて一堂に会したプロジェクト「USA フォー・アフリカ」のチャリティーソング。当時、全世界で2,000万枚を超える売り上げを記録した

スペルのコール・アンド・レスポンスの要素などを取り入れたR&Bは、先に触れたようにロックンロールのルーツのひとつで、両者は表現の形は違いますが、根っこが共通している双頭の龍とでも言うべき存在です。

商業的な規模の大きいロックのほうが目立っていましたが、R&Bもロックと並行して変革を遂げていきました。特にリズム面の変化ではR&Bのほうが先駆的でした。8ビートを基本とするロックに対し、60年代後半には16ビートのファンクと呼ばれる音楽が、ジェイムス・ブラウンやスライ・ストーンによってつくられます。70年代になるとロックやジャズのミュージシャンもファンクのリズム感覚を身に付け、それがフュージョンやAOR（アダルト・オリエンテッド・ロック）と呼ばれる音楽の誕生へとつながっていきました。

1970 年代以降のロックの潮流

1970年代にはピンク・フロイド、レッド・ツェッペリン、クイーンなど数多くのグループが、ロックの幅を大きく広げていきました。大人も聴ける音楽になったロックは、70年代後半から80年代にかけて商業的に大きく成長し、世界的規模でポピュラー音楽の主流を占めるに至りました。国際的なネットワークを通じて欧米とタイムラグなく日本で洋楽が聴かれるようになったのはこの時期からです。

ロック史を振り返ると、音楽が直線的に発展するのではなく、ときには原点に立ち返って、あるいは脇道にそれて、リズムやメロディーやハーモニーを再構成しようとする動きが間歇的に起こっています。それはロックが時代の変化を反

映してきたからです。例えば、70年代後半、若者の失業率の高さが大きな問題になっていたイギリスでは、商業的に肥大したロックへの批判をこめて、シンプルな表現のパンク・ロックが生まれました。また、デジタル機器が生活に入りこんできた80年代には、コンピューターやシンセサイザーのサウンド、ヘッドホンのクリック音に合わせてレコーディングを行うスタイルなどが一般化しました。

ロックに影響を与えた音楽

特定の地域で生まれた音楽がロックに影響を与えることも少なくありません。例えば、ジャマイカで生まれたレゲエはロックと同じ楽器を使いますが、ビートのアクセントの置き方の違いによって音楽の表情が全く異なります。ボブ・マーリーをはじめとする世界的ミュージシャンの登場も手伝って、レゲエは70年代からロックと交流しながら広がっていきました。またラテン音楽はアフロ・キューバン・ジャズやラテン・ロックの時代から近年のレゲトンまで、長年にわたってアメリカのポピュラー音楽の主流に影響を与え続けてきました。サンバやボサノヴァといったブラジル音楽も同様です。89年の冷戦終結前後からは、ワールド・ミュージックという名でアフリカをはじめ世界各地の音楽とロックの接点も広がっていきました。

自由なビートやサウンドの台頭

マイケル・ジャクソンからボブ・ディランまで、アメリカの



1980年のデビューから現在に至るまで、多岐にわたる音楽要素を取り入れ進化し続けるアイルランドのロックバンドU2。アーティストグループでのグラミー賞世界最多受賞記録を保持するほか、2005年には「ロックの殿堂」入りを果たした

人気スターがジャンルの壁を越えて一堂に会した『We Are the World』が1980年代のポップなロックを象徴する音楽だったとすれば、90年代に入って注目されたのはオルタナティヴでした。そう呼ばれたのは、それまでのロックとは一味違う音響やリズムで演奏された音楽です。当初はインディーズから発売された作品が多かったため、大手に「対して」「もうひとつの」という意味で「オルタナティヴ」と名付けられたのですが、U2、ニルヴァーナ、グリーン・デイらの活躍を通じて、オルタナティヴも主流の音楽に合流していきました。

21世紀に入って、資本のグローバル化が進み、社会格差が広がり、消費の形が複雑化すると、ロックもその影響を受けました。レゲエの音響の工夫から生まれたダブ、反復するエレクトロニックなビートで成り立つハウスやテクノ、あらゆる既成の音源をサンプリングして使うヒップホップなど、かつてはアンダーグラウンドだった音楽がロックに隣接して市民権を得て、相互交流が進みました。それに伴ってロックはポピュラー音楽の単独の覇者ではなくなりつつあり、一部には伝統芸能化していく動きも見られます。

かつては洋楽ファンなら誰もが知っているヒット曲がありましたが、SNSが主要メディアのいまは好きな音楽を1人で聴くことが増え、ヒットチャートの存在は相対的に影が薄くなりました。それを補うかのように、生演奏の場を他者と共有するコンサート・ビジネスが盛んになっていることも特筆すべきでしょう。

ビートルズ来日から 60 年を振り返って

私の中で特に印象深いのは、60年代のビートルズやボブ・ディランの音楽、そして70年代のパンクです。これは世代

的な理由もあるでしょう。ワールド・ミュージックを聴くようになって、サウンドの豊かさと多様性に圧倒されたことも忘れられません。

AI、SNSなどの発展により、今後ますます音楽は多様化していくでしょう。音楽評論家の相倉久さんは「あらゆる音楽はポップス化する可能性を秘めている」と言いました。例えば、現代音楽の関係者にしか知られていなかったミュージック・コンクレートは、60年代にビートルズがその手法を使った曲をつくると、ポピュラー音楽として知れ渡りました。

聴きたい音楽がいつでも聴ける現代は、膨大な音源がありすぎて、自分の聴きたい音楽を探すのが一苦労かもしれません。しかし、たまたま聴いた音楽に心惹かれる偶然の出会いが、日常にあふれていることも確かです。音楽は必要とする心があれば巡り合えるものです。必要とする音楽がなければ、つくって人と分かち合うのもいいでしょう。人は1人で生きていくことができないようにプログラムされた生き物です。音楽は人と人とがコミュニケーションを育むために生まれた素晴らしい存在だと思います。

北中正和(きたなか・まさかず)

1946年奈良市生まれ。京都大学理学部卒。音楽評論家。元東京音楽大学非常勤講師。JASPM、MPCJ会員。新聞、雑誌、放送、ウェブ他で音楽を研究・紹介・評論している。ウェブマガジン『ERIS』編集協力。『ビートルズ』『毎日ワールド・ミュージック』『事典 世界音楽の本』『ラジオからロックンロールが聞こえる』など編著書多数。2000年から2012年までNHKFM「ワールド・ミュージック・タイム」のDJをつとめた。



【ポピュラー音楽用語集】

ここでは前項「ロック通史」の中に登場した用語をご説明します。

AOR(アダルト・オリエンテッド・ロック)

70年代中期に出現した。和製英語であり「大人向けの洗練されたロック」という意味をもつ。

アフロ・キューバン・ジャズ

ビバップ(1940年代初頭、スウィング・ジャズに飽きた若いミュージシャンが始めたジャム・セッションの中から生まれた新しいスタイル)とキューバ音楽やラテン音楽を融合させたジャズ。

オルタナティヴ・ロック

60年代ロックへの回帰を目指して、商業主義に反発し普遍的な価値をもつ音楽を志向する。

カントリー

アメリカ南部の白人労働者を中心に広まったジャンル。南部訛りの英語で郷愁的な歌詞を歌い、伴奏にはバンジョー、マンドリン、スティール・ギターなどの弦楽器を使うものが多い。

ゴスペル

19世紀以前からアフリカ系アメリカ人の教会を中心に発展してきた黒人霊歌に由来。

ジャズ

アフリカ音楽のリズム、初期のブルース、ヨーロッパ各地の舞曲などがニューオーリンズで融合して生まれた。「スウィング」と呼ばれる独特のリズム、即興演奏などが特徴。

ソウル

R&Bの発展形。情熱的な歌唱、多彩なコード進行、大規模な楽器編成、動きの多いベースライン、強調されたポリリズム(異なるリズムを重ね合わせること)などが特徴。

テクノ

アメリカのデトロイトで生まれた、電子楽器を多数使用したダンスミュージック。実験的なスタイルをもつ。

ハウス

アメリカのシカゴで生まれた、電子楽器を多数使用したダンスミュージック。ゴスペルやソウルの要素をもつ。

パンク

シンプルな楽器編成ながら、反体制的な歌詞を過激なサウンドで表現した音楽。

ヒップホップ

ファンクから派生したアフリカ系アメリカ音楽の一つ。言葉をリズムにのせるラップ、短いフレーズの執拗な反復、ターンテーブルのスクラッチ音などが特徴。

ファンク

ロックの強い影響を受けてソウルから派生した。セブンスを多用するコード進行、単純な8ビートを刻むドラムスの上でギターとベースが織りなす複雑なポリリズムなどが特徴。

フュージョン

ジャズの実験精神が昂じてロックとの融合を試みた結果誕生した。高度な演奏技巧や作曲技法を強調したものが多い。

ブルース

19世紀以前から、アフリカ系アメリカ人の間で日常的に歌われていた音楽に由来する。

ミュージック・コンクレート

現代音楽のジャンルの一つで、電子音や環境音などの音素材を加工した音を用いて、音楽作品としたもの。「具体音楽」ともいう。

ラテン

中南米で生まれたルンバ、マンボ、サルサ、サンバ、ボサノヴァなどの総称で、スペイン語やポルトガル語で歌う。

リズム&ブルース(R&B)

ブルースに洗練されたスウィング・ジャズの要素が加わって、1940年代にアフリカ系アメリカ人の間で生まれた。

レゲエ

1960年代後半にジャマイカで誕生した。ギター、ベース、ドラムス、キーボードなどによるロックの編成にコンガなどのラテン系パーカッションを加え、ジャマイカ訛りの英語で歌う。

レゲトン

1980年代半ば頃にパナマで発祥し、1990年代にかけて発展したスペイン語のレゲエ。

ロック

1950年代、アメリカの若者たちの間でR&Bとカントリーなどが融合してロックンロールが誕生し、そこから派生した多様な音楽の総称を「ロック」という。

作成:ヴァン編集部 参考:高等学校用教科書『高校生の音楽』『MOUSA』(教育芸術社)

時代を駆ける大衆文化、メディア

コラムニスト 泉 麻人

日本における大衆文化とメディアは、手を取り合うように成長を続けています。その変遷と各時代の特色ついて、コラムニストの泉麻人さんに語っていただきました。

ビートルズ来日、その頃

1966年——新聞の番組表を眺めると、週に4、5本のカラー番組にわざわざ“カラー”という表示が付いていた時代。僕の初カラーは、『ウルトラマン』の「伝説怪獣ウー」の回だったのを覚えている。『鉄腕アトム』などのアニメーションが普及していた60年代初頭から一変、実写の超人もの特撮番組が一般的になっていったのは、この頃からだったか。カラーの恩恵を受け、テレビ番組が充実していった。僕も夢中になったものだ。『巨泉・前武ゲバゲバ90分!』はその後のお笑いを先取りしたようなコント番組。『夜のヒットスタジオ』は、その後20年以上続く長寿番組となった。

同じ頃、若者をざわつかせていたもの……エレキブームをきっかけに、グループ・サウンズが流行り、そしてフォーク・ソングへとバトンが渡る。と同時に、男性のロングヘアーやトラッド・ファッションを多く見かけるようになった。ファッションの流行が男性の中で巻き起こりはじめたのは、この60年代後半からのことだった。この頃、「アングラ」という言葉があったが、これはサブカルチャーの前身ともいえるだろう。当時流行っていたアングラ演劇は、寺山修司の「天井桟敷」をはじめ、佐藤信の「黒テント」、唐十郎の「状況劇場」なんていって、小さな芝居小屋で独自の世界が繰り広げられていた。これらを見ても分かるが、「アングラ」は、安保論争や学生運動の影響により、アナーキーな意味合いが色濃かった。



1966年のカラーテレビ売り場

この時期の僕はといえば、親に買ってもらったリコーオートハーフ（小型カメラ）片手に、廃止寸前の都電を見に行っていた。モータリゼーションによりインフラが過渡期を迎えていた時代で、勇退してゆく都電や蒸気機関車をフィルムに収めようとこぞって現れたのが、“鉄ちゃん”の元祖ともいえるだろうか。



漫画雑誌の数々（1960年前半）



ファミコンで遊ぶ子どもたち（1980年半ば）

1966、67年頃に無双していた『少年サンデー』から輩出されたのは、『おそ松くん』『オバケのQ太郎』『伊賀の影丸』だった。その後、『巨人の星』『あしたのジョー』が産み落とされてからは、『少年マガジン』が追い上げた。この頃の漫画は、団塊の世代に合わせて描かれていたため、画風も内



家庭の娯楽を潤したビデオデッキ（1980年前半）

容も次第に大人びてゆく傾向にあった。小学生の僕はというと、赤塚不二夫チルドレン。月刊誌の『少年』に連載されていた『まかせて長太』からはじまり、『おそ松くん』のコミックスは全巻制覇した。あのトキワ荘が自宅から近かったのだが、残念ながらその存在が世に知られてゆくのは70年代後半頃。もっともととのことだった。

60年代終わりからはラジオの深夜放送ブームが巻き起こった。フォーク・ロックやアメリカン・ポップスなどの音楽情報は、ラジオから“エア・チェック”していた時代だ（いまや著作権的にNGだが）。パーソナリティが投稿はがきを読み、視聴者とコミュニケーションを取る様子は、今でいうチャットのようなもの。そういったコアなムードが人気の理由だった。また、歌謡曲がメインだったテレビ番組では流れないようなヒット曲が、若いミュージシャンによってラジオで拡散されていた。70年代中頃にはラジカセの時代到来となる。ラジオで仕入れた好みの曲をカセット・テープに収め、カーステレオにがちゃりと流し込んでドライブを楽しんだ。

70年代の終わりの頃は、「インベーダー・ゲーム」が爆発的ヒットを起こしていた。アーケードゲームからはじまり、喫茶店の卓上ゲームが普及する。「インベーダー・ゲーム」といえばピコピコした電子音だが、テクノミュージックと結びつくものがある。YMOの細野晴臣もゲームをテーマにした音楽を制作していたが、これらは、テクニカルな時代に移行してゆく70年代の象徴だったといえる。子どもや若者だけでなく、大人がゲームを嗜むようになったのは、テレビ・

ゲームが波及してからのこと。80年代に入ると、ファミコンによるロールプレイングゲームがヒットする。『スーパーマリオ』、『ゼルダの伝説』、『ドラゴンクエスト』……。公共の場で楽しまれていたものが、徐々にパーソナルな空間のものへと変容してゆく。

生活を変えたメディアの登場

79年に登場したウォークマンにより、音楽の聴き方が劇的に変わった。音楽を、どこにでも持ち歩けるようになったのである。僕が新入社員の頃もやっぱり、欠かさず通勤電車に持ち込み、映画『コヤニスカッツィ』を観ているかのよ



初代ウォークマン（1979年発売）



パソコン売り場(1990年前半)

うに車窓を眺めていた。

そしてビデオの誕生。家庭内のチャンネル戦争を終戦に持ち込んだ、画期的なメディアだ。僕が入社した『週刊TVガイド』の東京ニュース通信社では、『月刊TVガイドビデオコレクション』を新たに刊行した。僕も家庭用ビデオデッキを購入し、『レッツゴーヤング』などを保存していた。空のビデオテープが1本30分で5000円した頃。何度も上から焼き直していくのが当たり前で、非常に高価なものだった。

80年代、松本隆などフォーク・ロック界隈の人材たちが歌謡曲に携わるようになり、ジャズやフュージョンを取り入れたことで歌謡曲が洗練されていった。演歌などの和製ポップスから、洋楽化したのである。CDが台頭しはじめたのはこの頃。溝がない、すぐに早送りできるという便利さに驚かされた。時を同じくして到来したバブル経済は、なんといっても「ディスコ」なしでは語れない。外遊びがメインであり、ディスコで聴いたユーロビートに、若者たちが陶醉した時代であった。

東の間の極楽浄土が泡沫となった90年過ぎ、いよいよインターネットが普及しはじめる。すぐにはパソコンに移行しなかった僕がようやく使いはじめたのは、連載『ホームページ秘宝館』で、おかしなサイトを集めていた頃だった。

時代を動かす“便利さ”が勝てないもの

IT用語の使われ方に注目すると、この30年弱で大きく変容していることに気付く。2001年上映、スティーヴン・スピ

ルバーグ監督の『A.I.』では、「AI」はロボットとして描かれていた。しかし実際は物体を伴わず、システム上に存在するイメージが一般的になっている。ユーミンが歌声をAIで編集してリリースしている時代である。現代を象徴する重要なメディアといえるだろう。

どんなジャンルも手軽に情報を探すことができる今。原稿は変わらず手書きの僕も、情報収集はインターネットがメインだ。「あれ、ちょっと聴きたいな」と思って調べれば、即座に懐かしの曲を聴くことができる。気になる店も、どこにあるかがすぐに分かる。しかし、そんな便利なデジタルの時代でも、足を使って「わざわざ行くおもしろさ」は譲れない。その場所に行くまでの、路地の、細い道の空気感を、インターネットは教えてくれないから。

泉 麻人(いずみ・あさと)

コラムニスト。1956年東京都生まれ。慶應義塾大学商学部卒業。株式会社東京ニュース通信社で『週刊TVガイド』や『月刊TVガイドビデオコレクション』の編集を担当する。退社後、コラムニストとして雑誌や新聞での連載、エッセイなどを多く残している。著書に『冗談画報』という楽しい番組があった』『昭和50年代東京日記 - city boysの時代』など。



ポピュラー音楽は、生活や社会、学校教育にどのような影響を与えてきたのか

信州大学 教授 齊藤忠彦

本企画の最後は、この60年間でクラシック音楽とポピュラー音楽がどのように学校教育に取り入れられてきたのかを、齊藤忠彦先生に振り返っていただきました。

クラシック音楽とポピュラー音楽の二項対立の時代

1966年、ビートルズの来日を契機に、日本における本格的なロック文化の門戸が開かれ、ギターやベース、ドラムを手にする若者たちが増えました。1970年代から1980年代にはシティ・ポップやニューミュージックなど多様な音楽が広がり、ポピュラー音楽は最盛期を迎えました。一方、同じ時期には、クラシック界の帝王と呼ばれていたヘルベルト・フォン・カラヤンがベルリン・フィルハーモニー管弦楽団を率いて来日公演を行い、オーディオブームも重なり、日本におけるクラシックブームは1980年代にピークを迎えました。当時は、クラシックとポピュラーという二項対立が存在し、学校教育でもポピュラー音楽を教材に取り上げることに抵抗があるという見方がありました。

クラシック音楽とポピュラー音楽の融合の時代へ

1980年代末から1990年代にかけて、国内のポピュラー音楽は総称してJ-POPと呼ばれるようになりました。2000年代にはデジタル配信やインターネットの普及により音楽の聴き方が変化し、多面的なポップス文化の時代へと移行しました。時代の流れとともに、クラシック音楽とポピュラー音楽の二項対立は次第に和らぎ、融合や共存のイメージが強まります。実は、その背景には、ビートルズやカラヤンの功績があったのです。ビートルズは楽曲に弦楽四重奏やバロック音楽的な要素を取り入れ、ロックとクラシックの垣根を越えた作品を発表しました。カラヤンはクラシック音楽の大衆化を目指し、映像コンテンツ制作を先駆けました。近年では角野隼斗のように、クラシック、ポップス、ジャズなどジャンルを横断する若手の音楽家も現れています。音楽学者の岡田暁生は、ポピュラー音楽の大半は、特に旋律構造や和声や楽器の点で、19世紀のロマン派音楽をほとんどそのまま踏襲しているといっても過言ではないとし、クラシックとポピュラーは

地続きであって、決して世間で思われているほど対立的なものではないと指摘しています。

さらなる発展の時代へ

現行の中学校学習指導要領〈音楽〉では、目標の柱書に、中学校音楽科で育成する資質・能力について、「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる」ことと示しています。子どもたち一人一人が音楽を学ぶことの楽しさや意義、学ぶことの価値を実感できるようにすることが重要です。そのためには、子どもたちを取り巻く生活や社会の中の音や音楽、音楽文化に目を向けることが一層大切になるでしょう。

近年は、高校の軽音楽部で音楽に取り組む生徒が増加しています。軽音楽は少人数で音楽を構成でき、各パートが明確な役割を担います。例えば、ボーカルは主旋律、ギターは和音や対旋律、ベースは根音やビート、ドラムはリズムといった具合です。こうした体験を通して、西洋音楽の基礎的な音楽の仕組みを自然と学ぶことができます。また、一人一人が自分のパートの役割を果たすとともに、仲間と協働して音楽をつくり上げていく過程は生徒たちにとって大きな魅力となっています。60年前のビートルズ来日という文化的な刺激は、形を変えながら今の生徒たちにも影響を与えているといえるでしょう。若き日のビートルズのように、次世代を担う若者たちが中心となり、新しい音楽文化を創造し、さらなる発展へと導いてくれることが期待されます。

齊藤忠彦(さいとう・ただひこ)

信州大学教育学部音楽教育コース教授。中学校用教科書『中学生の音楽(1／2・3上／2・3下／器楽)』(教育芸術社)に著者として携わる。著書に『新版 教員養成課程 小学校音楽科教育法』(教育芸術社)など。2024年、文化芸術教育の充実・改善に向けた検討会議(文化庁)委員。2025年～、中央教育審議会初等中等教育分科会 教育課程部会 芸術ワーキンググループ(文科省)主査代理。



生徒授業協議会の様子

「自立した学習者」を育むために ～生徒がつくる授業「みがく」の実践～ 豊川市立御津中学校

本誌巻頭では対話型の教育について、平田オリザ先生にその在り方をご示唆いただきました。大きな転換期を迎えている私たちの生活や社会に柔軟に対応できる子どもたちを育もうと、学校現場ではさまざまな試みが続けられています。本レポートでは、愛知県豊川市立御津中学校が取り組む、生徒を主体とした授業実践「みがく」をご紹介しますとともに、実践にかける思いを語ってくださった元音楽科教員で校長の峯村邦泰先生のインタビューをお届けします。

生徒がつくる授業「みがく」とは、みずから学習、みんなで学習を目標とした、御津中学校の学習スタイルです。愛知県では、「主体的・対話的で深い学び」からの授業改善に取り組むために、「自立した学習者」を育てる教育活動への転換を進めており、その中で御津中学校では、「自主 友愛 勤労」の校訓のもと、知・徳・体の調和のとれた人間形成を図るために、この「自立した学習者」を目指した授業を展開しています。今回は、3年3組の音楽科における「みがく」の授業を取材しました。

「生徒がつくる」合唱の授業

本時は、合唱コンクールに向けた『タイムリーパー』（作



『タイムリーパー』を合唱する3年3組の生徒

詞：覚 和歌子／作曲：三宅悠太）の歌唱練習です。進行やタイムキーパーを含め、授業の始めから終わりまで



教師役の教科リーダーが授業の流れを説明する



各パートの発表を聴いて、感じたことを共有する



パートごとに分かれて、歌いながら気づいたことを互いに伝え合う



気になる箇所を取り出し何度も歌い試す

全て生徒のみで展開されます。事前に、教科リーダーと呼ばれる教師役の生徒3人が、前時までの学習内容をもとに本時の授業の流れを考え、先生と打ち合わせを行ったうえで実施されます。

生徒が考えた本時のめあては、「音程と入りのタイミングを100%そろえよう」。パート練習を中心に、それぞれの課題を見つけ、解決方法を探り、学級全体で共有し振り返るまでの流れが組まれています。授業の始めには、教科リーダーから「自分との違いに気づく」「プレス」など、めあてにせまるためのキーワードが提示され練習がスタート。パート練習の内容や方法も全て生徒に委ねられており、各パートリーダーを中心に工夫しながら練習を進めていきます。同じ部分を何度も繰り返し歌って改善すべき箇所を探したり、互いの声を聴き合いながらメンバー全員で意見を出し合ったりする姿が見られるなど、およそ20分間で充実した練習が行われました。そして、授業の後半では、パートごとの発表を聴き合い、練習で意識したポイントが音楽から伝わったか、練習前との変化が感じられたかを学級全体で共有します。最後は全員で歌い、個人やグループ間で本時を振り返り、授業はまとめられました。

生徒自身で授業を検証する

授業後には全校が体育館に集まり、それぞれの学級ごとに生徒授業協議会が開催されました。本会は、生徒が自ら行った授業を生徒自身で検証することで、授業改善に向けた課題を明らかにすることを目的としています。「授業みがきカード」と呼ばれる授業改善の視点が書かれたチェックシートと照らし合わせながら自らを評価した後、話し合いの中から出された学級全体としての評価を全校で共有し、会は締めくくられました。

授業や協議会では、生徒たちが課題解決に向けて、さまざまな意見をもち寄り対話する姿が印象に残っています。また、驚くべきことに、50分の授業の間、教師は生徒からの疑問に少しヒントを与えたのみで一度も進行に関わっていません。授業を見届けた音楽科の平山理恵先生は、「授業がうまく回るかと不安だったが、生徒たちで課題を立て、話し合いながら授業をやり切った姿に感動した」と振り返ります。こうした取り組みが、多様に変化する社会を力強く生きる子どもたちの糧となることを期待します。

(ヴァン編集部)

INTERVIEW

インタビュー

全校で取り組む「みがく」

——「みがく」を始められた背景について教えてください。

峯村：本校の「みがく」は、主体的・対話的で深い学びを具現化したものです。子どもたちの主体性が議論されて久しいですが、今も言われ続けているのは、まだ「そうっていない」から、そして「時代が欲している」からだと思います。「予測困難な未来をどう子どもたちが生き抜くか」、「AI が普及する中で人間の強みとは何か」、「少子化や多様性にどう向き合うか」——。パラダイムシフトの真っただ中で、「主体的」という言葉の本質を問い続けるうちに、これまでの教師主導の授業を改めるべきだと考え、生徒が自ら授業を組み立てられるような「自立した学習者」を育むための研究がスタートしました。

——本日の授業では、積極的に話し合いながらパート練習に取り組む生徒の姿が印象的でした。

峯村：昨年までは全く違ったんです。この1年での変化の要因は、全校、全教科で「みがく」に取り組んだことだと思います。学びのプロセスを統一させ、対話的な言葉が自然とできるようになるまで積み重ねてきました。今までできなかった言葉のキャッチボールができるようになり、今度はその質や当たり前のラインが徐々に上がってきています。現在も話し合いがより深まる方法や、ホワイトボードなどの活用方法の検証を全校で続けているところです。

——「みがく」では、本時のように生徒の進行による授業が特徴的ですが、どのような位置付けでしょうか？

峯村：「みがく」には3つの段階があります。レベル1は簡単に言えば、教師主導の授業で、例えば、初めてアルトリコーダーの使い方を学ぶときなど、教師が教える



生徒が戸惑ったところをアドバイスする平山理恵先生

べき内容に重点が置かれた授業を指します。次のレベル2は、生徒に半分以上委ねた授業です。教師は本時の取り組みを伝え、あとは生徒に任せて、ときおり対話のヒントを授ける形です。そしてレベル3が、生徒の進行による授業です。教師は教科リーダーとの事前打ち合わせで授業の組み立て方をアドバイスするのみで、授業中は終始支援に回り、ほぼ出番はありません。単元の中で、基本的に1回はレベル3を行うことにしています。

——通常のカリキュラムに含まれるのですね。評価はどのようにされていますか？

峯村：「みがく」レベル3では、生徒の意見の出し方や回数などを見取り評価します。また、評価につながる振り返りを大切にしており、個人や班ごとに行う振り返りのほか、本日ご覧いただいた協議会形式の、学級全体での振り返りも設けています。加えて、本校では、今年度から技能教科における定期考査の筆記試験を廃止しました。ですので、音楽では技能テストと授業の振り返りや鑑賞ノート、そして「みがく」レベル3における評価で成績を付けています。

——どの生徒も振り返りカードに授業で感じたことをたくさん記入していましたね。書くためのトレーニングなどされていますか？

峯村：書くことを鍛えるというよりは、振り返りを粗末にしない取り組みを行っています。自身で振り返ったり共有したりすることで次の課題が明確になりますし、その気づきをたくさん経験させることで、自然と書くことへの負担を軽減できていると思います。

音楽は言葉のない対話

——「自立した学習者」を育むうえで、音楽をどのように捉えていますか？

峯村：音楽には長い歴史の中で培われてきた多数の様式や技法、価値観があり、それを限られた授業の中で扱うのですから、教師が教えるべき内容もあります。ですが、教えてばかりだと、生徒は表現する喜びを感じられず、受け身的になってしまいます。例えば歌唱なら、テンポ、ブレス、旋律の動き、リズム、歌詞など、いろいろな要素がありますが、ふだんの授業で教えるのはその中の1つか2つでよくて、積み重ねの中で生徒の学び方は変わっていきます。学校における音楽は、プロの演奏家を育てることが目的ではありません。生徒たちの表現を認め、音楽を通した感動を体験させることが最も大事で、そこに全人教育、あるいは情操教育としての音楽科の役割があると考えています。その意味では「音楽教育」ではなく「音楽への教育」と言えるかもしれません。



授業後にグループで振り返り、生徒授業協議会で意見を出し合う

——「音楽への教育」として印象深い出来事がありますか？

峯村：合唱コンクールに向けた練習などは最たるものだと思います。昨年ですが、合唱コンクールの2週間前になっても自信をもって声を出せるクラスが少なく、どうしたものかと考え、授業を急遽変えて私が全クラスの指導をしました。15分程度でしたが、合わせ方やブレスのタイミングなどを教えただけでも、生徒の歌声がどんどん変わっていききました。要するに、ほとんど会話はしていないけど、私の指揮する動作や目線、目力、ブレス、その一つ一つの所作で生徒に伝えられると思ったんです。対話というと、どうしても言葉を交わすものだと思うかもしれませんが、音楽においては言葉だけではなく、音や音楽同士でも対話になりうるのです。私が汗だくになりながら指揮する姿を見て、感じ取ったことを歌声にして応えてくれたのだと思います。

——言葉を交わさない対話が、生徒の意識を変えたのですね。

峯村：変わった校長だと思われたかもしれませんが、こちらの覚悟が伝わったのかもしれませんが、指導以外にも、中部フィルハーモニー交響楽団の協力を得て、私の指揮と解説で鑑賞教室などを行っており、生徒の気づきや学びにつながる取り組みをこれからも続けていきたいと思っています。

みんなの意識を変えることから

——「みがく」の導入により、授業スタイルは大きく変わったと思いますが、先生方の反応はいかがでしたか？

峯村：最初はとても苦労されたと思います。先生方に納得して実践していただくために、まずは研修を行うことから始めました。子どもの主体性を重視した授業実践を専門的に研究されている先生にご指導いただいたり、その先生が実際に行っている授業を動画で見てもらったりという機会をできる限りたくさん設けました。また、私が先生方をお願いしたのは「我慢」です。これは自身の反省も含めてですが、教師が想定した授業の流れからずれたり、質問や発問に対して意図した発言や動きでなかったりするときに、どうしても正してしまいたくなるのですが、それは間違っています。他の人と違うことをする、違う意見があるからこそ、そこに学びが生まれるのです。そのように我々の認識をシフトしていく必要があります。そのうえで協働的な学びを続けることが、生徒の心理的安定や自己肯定感を育み、さらに学ぼうとする意欲につながると考えています。

——教員の意識改革から始められたのですね。生徒にはどのように説明されましたか？

峯村：校長授業という形で、これからの時代、社会ではどのような姿や能力が求められるのか、そのためにどのような授業を目指しているかを私が説明しました。そのときも、別の学校の事例を動画で見てもらったのですが、その映像では授業協議会で中学1・2年生が、もう教師さながらに自分たちの授業について解説しているんです。まさに百聞は一見に如かずで、生徒たちの気持ちが大きく動いたという感じがしますね。

——そこから1年で今の状態にまでされたということで、これからがとても楽しみです。

峯村：そうですね。まだ研究を始めたばかりですが、成果も感じています。生徒会役員立ち合い演説会では、多くの立候補者が授業改善を公約に掲げ、会長になった生徒は「自分の意見が言える御津中」をスローガンに掲げています。これも「自立した学習者」の表れだと思います。「みがく」は今も生徒たちの手で進化し続けています。



熱い思いを語ってくださった峯村邦泰校長先生

令和7年度 全日本音楽教育研究会 全国大会（総合大会）

佐賀大会

育てよう 音楽と豊かに関わる子ども

第66回 九州音楽教育研究大会 佐賀県大会

第26回 佐賀県音楽教育研究大会
佐賀・小城・多久地区大会

令和7年10月23日・24日、全日本音楽教育研究会全国大会（総合大会）佐賀大会、第66回九州音楽教育研究大会 佐賀県大会が、佐賀市の高木瀬小学校、若楠小学校、金立小学校、金泉中学校、城北中学校、牛津高等学校、佐賀市文化会館で開催されました。大会の2日間を、小学校部会と中学校部会の発表を中心にレポートします。

佐賀市で全国大会開催

爽やかな快晴の下、全日本音楽教育研究会全国大会が開催されました。開催地の佐賀市は佐賀県の中東部に位置し、県の政治・経済・教育文化の中心都市として発展しています。佐賀平野の秋空を数々の熱気球が彩る「佐賀インターナショナルバルーンフェスタ」は、各国から多くの人々が訪れる一大イベントです。有明海の恵みあふれるこの地に、全国の音楽教育に携わる先生方が集まりました。本大会の大会研究主題「育てよう 音楽と豊かに関わる子ども」は、①主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善、②生活や社会の中の音や音楽の働き



全体合唱『フェニックス』

についての意識や、音楽文化についての理解を深める学習の充実、③授業改善のための指導と評価の一体化という3つの視点が基盤となっています。

小学校部会（1日目）

10月23日午前、高木瀬小学校、若楠小学校、金立小学校で6つの授業実践が行われました。

第1学年の鑑賞領域では、花房文乃先生（佐賀市立若楠小学校）がアンダソン作曲『おどる こねこ』を取り上げました。「ようすをおもいうかべて おんがくをきこう」という題材で、楽器の音色に注目したり音楽の展開を予



クラスが一体となって歌い上げる（佐賀市立若楠小学校 第4学年）
歌唱：思いを音楽で表そう～エピソードと思いを歌に繋げて～

想したりしながら、曲想と音楽の構造との関わりについての知覚を促します。

体を動かしながら音楽を聴く場面では、子どもたちが花房先生の動きをまねしながら、ヴァイオリンの旋律に合わせてこねこの動きを試したり、ペアで手を取り合いながら楽しく体を動かしたりする姿が見られ、身体を使って音楽のよさを味わっていました。

第4学年の表現領域・歌唱では、天野絵美先生（佐賀市立若楠小学校）が「思いを音楽で表そう～エピソードと思いを歌に繋げて～」という題材で歌唱の授業を行いました。授業者による自作曲『ありがとうの言葉にのせて』（※P34～「参考楽譜」に掲載）を教材に、児童のエピソードを交えた独自のマインドマップを作成したり、グループで話し合ったりして、どのように歌い方を工夫したらよいかを考えます。

天野先生の前向きな声かけがあり、児童は曲の特徴をしっかりと捉えながら、積極的に表現の工夫を考えてい



歌のマインドマップ

る様子でした。授業の最後には、手をつないだり肩を組んだりしながら歌っており、音楽を通して学級全体で心を通わせているような姿がうかがえました。

第4学年の表現領域・器楽では、牛島風香先生（佐賀市立金立小学校）が「いろいろな楽器が重なる豊かな響きを味わいながら、表現を工夫して合奏しよう」という題材で器楽アンサンブルの授業を行いました。それぞれのパートの役割を確認し、演奏に反映するための工夫を考えます。

児童は、朝練を申し出るほど熱心に取り組んできたそうです。授業でも対話を重ねながら『茶色の小びん』の練習を繰り返し、思いや意図を形にしている様子が印象的でした。

中学校部会（1日目）

同日午前、金泉中学校、城北中学校で4つの授業実践



積極的に発言する子どもたち（佐賀市立若楠小学校 第1学年） 鑑賞：ようすをおもいうかべて おんがくをきこう



音色や速度について、意見し合う（佐賀市立川副中学校 第3学年） 鑑賞：私たちが身近に聴き親しんでいる音楽の魅力を探ろう



曲を聴きながらアドバイスし合う

が行われました。

第3学年の鑑賞領域では、山口桂一郎先生（佐賀市立川副中学校）が「私たちが身近に聴き親しんでいる音楽の魅力を探ろう」という題材で、Mrs. GREEN APPLE『青と夏』、あいみょん『裸の心』を取り上げました。この2曲は生徒に実施した「ふだんどのような音楽を聴きますか？」というアンケートから選ばれたもので、生徒は日常で何気なく聴いている音楽をあらためて捉え直し、それぞれの意味や役割を考えます。

速度と楽器や声の音色に注目し、2曲を比べて特徴を捉えていきます。生徒は、どのような場面での音楽を聴きたいか、それぞれが自分の中で価値付けをしている様子でした。

第1学年の表現領域・創作では、吉村真希教頭（唐津市立厳木中学校）が「自分が気に入った『佐賀』を旋律で表そう」という題材で創作の授業を行いました。「自分が気に入った佐賀の写真」を用いながら、音楽 Web アプリケーション「カトカトン」を使って旋律をつくります。

それぞれが工夫した点を伝え合いながら、つくった音楽を友達と聴き合う場面では、イメージに合った音の高低やつながりができているかを聴き取り、イメージに近付けるための工夫を具体的に提案し合っていました。



創作する際の約束事を確認（唐津市立厳木中学校 第1学年）
創作：自分が気に入った「佐賀」を旋律で表そう



協議会の様子

全体会（2日目）

2日目には、佐賀市文化会館で全体会が開催されました。開会行事、研究概要説明に続き、指導講評が行われました。

文部科学省初等中等教育局視学官の志民一成先生は、「次期学習指導要領の改訂に向けての動きが本格化する現在、あらためて現行の学習指導要領の主旨に基づいた授業づくりを深化させる取り組みは意義のあるもの」と全体を振り返って述べられました。小学校部会については、学習指導要領実施状況調査における課題に対して、多くのヒントを見出せたとし、「曲全体を捉えるために、変化や音楽の縦と横の関係を抛り所に思考・判断できるようにする手立て」や、「社会の中の音と音楽との関わりを深めるための、教科等横断的な視点を取り入れたカリキュラム」を評価されました。

同教育課程課教科調査官の河合紳和先生は、各中学校・高等学校の研究授業の講評とともに、学習指導要領の目標に示された「表現や鑑賞の幅広い活動をとおして」という文言を取り上げられました。その実現のためには、「ポピュラー音楽なども含めた、生徒の日常生活にあふれる



古澤巖さんとピアニストの金益研二さん



大会長の副島和久先生による指揮で全体合唱が行われた

さまざまな音楽を扱い、生徒自身にとっての意味や価値を見極め、主体的・総合的に音楽と関わる能力を身に付けること」や「個人、ペア、グループなど学習形態を工夫すること」の重要性を示されました。

記念演奏は、佐賀県にルーツをもつヴァイオリニストの古澤巖さんによる演奏です。ワールド・ミュージック、クラシック音楽、映画音楽、オリジナル曲とバラエティ豊かな楽曲が披露され、その圧巻の技巧と軽快なトークで会場を沸かせました。

終幕は合唱曲『フェニックス』（作詞・作曲：弓削田健

介 / 協力：能登と長岡の児童生徒）での全体合唱です。作曲者の弓削田健介先生自らのピアノ伴奏にのせて参加者全員で歌われ、会は締めくくられました。

佐賀大会は、全国を視野に授業の質向上を目指し、授業研究に特化した大会となりました。大会終了後も、実施報告が更新されています。多くの子どもたちの学びにつながる有意義な研究の数々が、次の全国大会への新たな一歩になったことと実感しています。

次回、全日本音楽教育研究会全国大会は、2026年10月29日・30日に奈良県で開催されます。（ヴァン編集部）

音楽診断

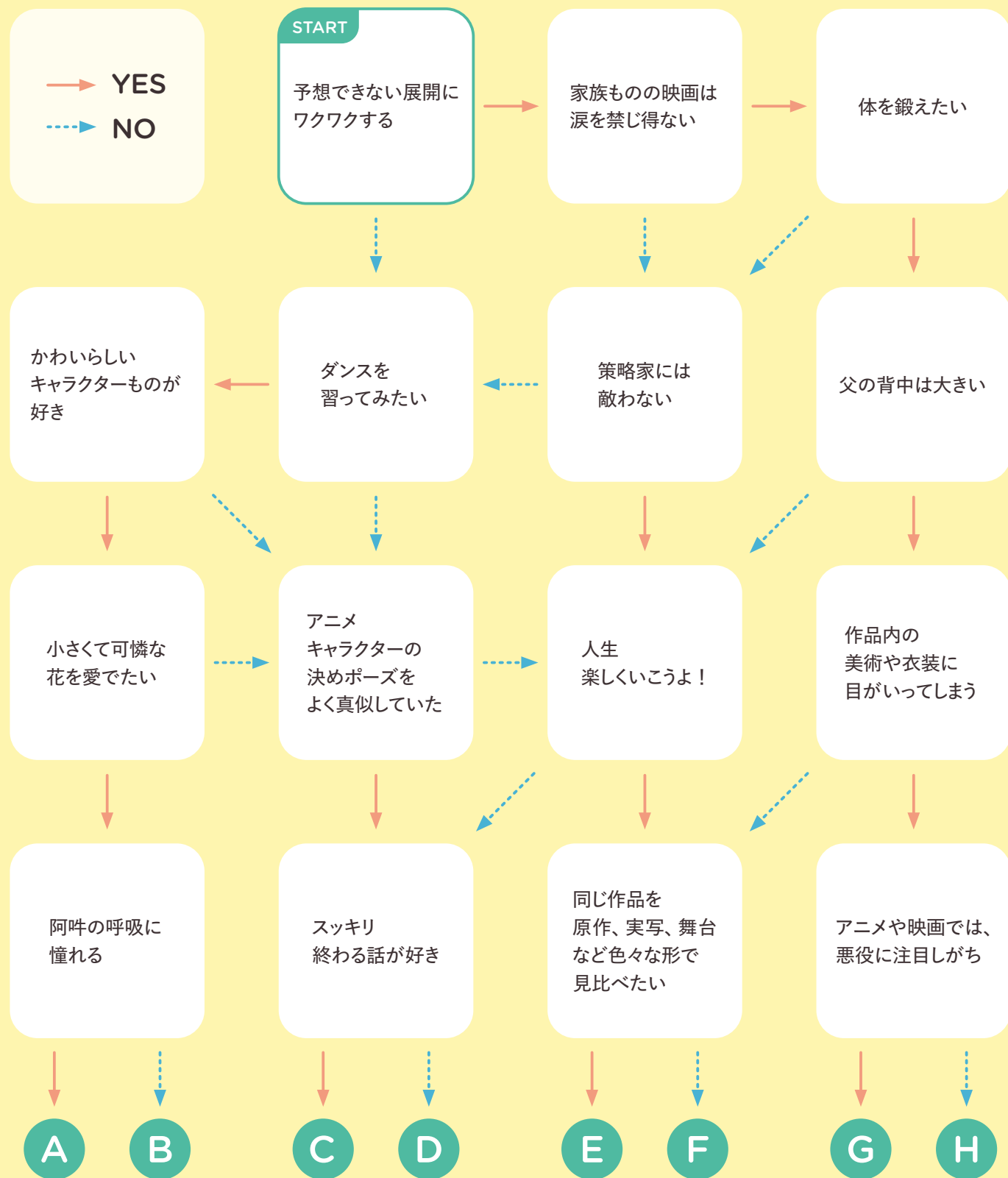
Kyogei Presents

第25回 歌舞伎編



『ヴァン』オリジナルでお届けする音楽診断企画の第25弾。
今回は、歌舞伎演目の中から、あなたの性格にぴったりの作品を診断します。

監修・解説 = 配川美加 Text = Mika Haikawa



あなたにぴったりの作品は？

A 涙ぐましい獅子の子育て『連獅子』

河竹黙阿弥 作／3世杵屋正治郎 作曲

場面は文殊菩薩の聖地、中国清涼山の石橋の近く。前半は狂言師（狂言を演じる役者）2人が石橋の謂れや清涼山の風景を踊った後、親子の獅子で「獅子の子落とし」の伝説を演じる。胡蝶に誘われて姿を消すと、文殊菩薩を拝むためにやって来た宗派の異なる2人の僧の論争になるが、獅子の出現を恐れて逃げて行く。後半は獅子の精の踊りを、親獅子は白頭、子獅子は赤頭で勇壮に見せる。能（石橋）を題材とする、松羽目物の長唄の舞踊劇。



C 日本の元祖ヒーロー『暫』

作者不詳

悪人方が善人方を苦しめ、善人方が危機一髪の瞬間に主人公が「暫く」と声をかけて登場し善人方を救う。通常の役名は、主人公が鎌倉権五郎景政、敵対する悪人が清原武衡だが、主人公は「暫」「シテ」、悪人は「ウケ」、赤い顔に腹を出した手下は「腹出し」、善人方は、腹出しが切ろうとして抜いた太刀の下になるので「太刀下」と呼ばれている。主人公らは大薩摩節を使って荒事で演じる。市川團十郎家の芸を集めた「歌舞伎十八番」の一つ。



E なにがなんでも酒だ酒！『棒しばり』

岡村柿紅 作／5世杵屋巳太郎 作曲

次郎冠者と太郎冠者は、主人曾根松兵衛の留守中にいつも酒を盗み飲むので、主人の計略によって次郎冠者は棒で縛られ、太郎冠者は後ろ手に縛られる。2人は縛られたまま協力して盃を酌み交わし、酒の肴に不自由な姿で舞うが、主人が帰ってくると追い回される。大正期、狂言《棒縛》を基に作られた松羽目物の舞踊劇。長唄を使った太郎の「御簾の俤」、次郎の「十七八は」、東路の「夕衣」、2人の「酒のさの字」など踊りの見せ場が多い。



G 親の仇討ち、桜に誓い『楼門五三桐』より「山門」

初世並木五瓶 作

京都「南禅寺」の山門で、盗賊の石川五右衛門は桜満開の中「絶景かな」と言って春の景色を賞賛する。鷹のくわえてきた遺書から父親の名前を知って、父の敵・真柴久吉への復讐を誓うが、そこへ通りかかって五右衛門に声をかけた巡礼こそ久吉だった。幕が開くと、三味線方は合引という台に右足を乗せ、下手の唄方と共に立って「足掛けの大薩摩」を演奏する。途中「カラクサ」という技巧的な三味線を入れて、壮大な場面の雰囲気づくりを行う。



※獅子の子落とし＝親獅子が千尋の谷に突き落とし駆け上げって来た仔獅子だけを育てるという伝説。※松羽目物＝能舞台を模した松羽目を背景に能楽（能・狂言）を主な題材とする舞踊作品
※荒事＝荒々しさを誇張した演出

配川美加
「歌舞伎音楽研究者」

1959年、神奈川県生まれ。東京藝術大学音楽学部楽理科卒業。同大学院音楽研究科修士課程修了。現在は、東京藝術大学、埼玉大学、駒澤大学非常勤講師、日本女子大学学術研究員、国立劇場伝統芸能伝承者養成所講師。著書に『歌舞伎の音楽・音』、共著に『まごころ三味線の本』『長唄の伝承 旋律形成に関する学際的研究』などがある。

イラストレーション：小倉マユコ

B 恋に酔い、花房と舞う『藤娘』

勝井源八 作／4世杵屋六三郎 作曲

藤の花が絡んだ松の大木の前で、黒い塗笠を被り、藤の枝を担げた藤の精が、長唄「人目せき笠」から可憐に踊り始める。「男心の憎いのは」以下、恋心をしっかりと踊り、「藤の花房」からの「藤音頭」ではほろ酔い気分を見せる。「松を植よなら」からはリズムカルな踊り地で、やがて名残を惜しみながら消えて行く。初演は滋賀・大津の土産物として今も残る大津絵の藤娘が絵から抜け出して踊るという趣向だった。他にも様々な演出がある。



D 主君のため、睨み合う兄弟『車引』（『菅原伝授手習鑑』三段目より）

2世竹田出雲・三好松洛・並木千柳 作

三つ子の兄弟の長男、梅王丸が仕える菅丞相（菅原道真）と三男、桜丸の主人、斎世親王（醍醐天皇の弟）は、次男の松王丸の主人、藤原時平の讒言（人を陥れるため偽って悪く言うこと）により罪に落とされる。浪人となった梅王丸と桜丸は、京の都の吉田神社の鳥居前で時平の乗る牛車に襲いかかるが、松王丸に遮られ、現れた時平の威力に立ちすくむ。遺恨を残して三人は別れて行く。隈取など荒事の演出で、竹本や陰囃子が活躍する。



F 騙りに騙る、わっちこそは『青砥稿花紅彩画』（白浪五人男）より「浜松屋見世先」

河竹黙阿弥 作

「白浪」は盗賊という意味。5人の盗賊の内、弁天小僧と南郷力丸は、武家の娘と若党の姿で呉服屋の浜松屋を強請り、頭の日本駄右衛門が侍姿で2人の本性をわざと暴くが、実は浜松屋を油断させる計略だった。弁天小僧が盗賊の正体を現わして語る「知らざア云って聞かせやしょう」以下は、犯罪履歴だが小気味よい音楽的な名セリフ。その後、稲瀬川で五人男が勢揃いし、別々に落ち延びる。



H 兄のもとへ、大根片手に馬走らす『矢の根』

作者不詳

曾我五郎は正月の吉例に矢の根（鐵）を砥ぐ。年始で大薩摩主膳太夫が訪れ、持ってきた年玉の宝船の絵を枕に初夢を見る。夢の中に兄の十郎が現れ、兄弟の父の敵、工藤祐経に囚われていることを告げる。五郎は兄の危急を救うため、初荷の大根を積んだ裸馬に打ち乗り、大根を轡にして駆けて行く。五郎は七本車鬘の鬘に筋限の隈取をするなど荒事で演じ、大薩摩節を使う。市川團十郎家の芸を集めた「歌舞伎十八番」の一つ。



研究大会

10月 October

22日(木)・23日(金)

第67回 九州音楽教育研究大会 熊本大会
第66回 熊本県音楽教育研究大会 熊本市大会
市民会館シアーズホーム夢ホール
(熊本市市民会館) 他

〈大会研究主題〉
感じ取ろう 伝えあおう 高めあおう 音楽の喜びを

〔問い合わせ〕
熊本大学教育学部附属中学校 米満 繁
〒860-0081 熊本市中央区京町本丁5-12
TEL 096-355-0375 / FAX 096-355-0379
kumaonken@gmail.com

29日(木)・30日(金)

令和8年(2026年)度
全日本音楽教育研究会 全国大会
(幼・小・中・高校部会大会) 奈良大会
第68回 近畿音楽教育研究大会 奈良大会
なら100年会館 他

〈大会研究主題〉
音楽で培おう シンの力

〔問い合わせ〕
斑鳩町立斑鳩南中学校 校長 上西秀勝
〒636-0133 奈良県生駒郡斑鳩町目安北3-1-77
TEL 0745-74-5800 / FAX 0745-74-5978



教育芸術社ウェブサイトでは、
上記の研究大会やその他のイベントなどの
情報も掲載しています。

https://www.kyogei.co.jp/data_room/event/

11月 November

6日(金)

第57回 中国・四国音楽教育研究大会 香川大会
全体会会場：サンポート高松 大ホール

〈大会主題〉
ときめく瞬間 響き合う 音と心

〔問い合わせ〕
香川大学教育学部附属高松小学校 三好賢太郎
〒760-0017 香川県高松市番町五丁目1番55号
TEL 087-861-7108 / FAX 087-861-1106
miyoshi.kentaro@kagawa-u.ac.jp

13日(金)

第68回 北海道音楽教育研究大会 釧路大会

〈大会主題〉
音楽のよさを分かち合い 確かな力を育む音楽教育

〔問い合わせ〕
釧路市立湖畔小学校 教頭 斎藤貴子
〒085-0806 釧路市武佐2丁目27-16
TEL 0154-46-1151 / FAX 0154-46-1152
kus.onken@gmail.com

13日(金)

第74回 東北音楽教育研究大会
第62回 宮城県音楽教育研究大会 仙台市大会
日立システムズホール仙台(仙台市青年文化センター)
他

〈大会主題〉
音楽で広げる輪 つなげよう未来へ
～感性を働かせて
仲間と「味わう音楽」「生み出す音楽」～

〔問い合わせ〕
仙台市立川前小学校 校長 大槻千秋(実行委員長)
〒989-3212 仙台市青葉区芋沢字赤坂16
TEL 022-394-2225 / FAX 022-394-6727

20日(金)

第68回 関東甲信越音楽教育研究会
栃木大会(那須大会)
大正堂くろいそみるひいホール(黒磯文化会館)

〈大会主題〉
分かち合い つながり広がる 音楽の学び
～実感! 心が動く音楽の力～

〔問い合わせ〕
那須塩原市立大原間小学校 教頭 矢板浩美
〒329-3156 那須塩原市方京3-14-6
TEL 0287-67-1055 / FAX 0287-65-2694
es-ooharama@city.nasushiobara.ed.jp



Spring Seminar

スプリングセミナー2026

— 新作合唱曲による公開講座 —

コンクール自由曲向けの新曲発表会「スプリングセミナー2026」を開催いたします。

同声・女声・混声の作品を作曲者、司会者、合唱団と学びます。

※詳細や最新情報は弊社ウェブサイト等でご確認ください。

●日程：2026年3月27日(金)

●会場：東京音楽大学TCMホール
(中目黒・代官山キャンパス)

●司会：藤原規生

●作曲家：[同声合唱] 森山至貴、横山潤子
[女声合唱] 瑞慶覧尚子、アベタカヒロ
[混声合唱] 森田花央里、信長貴富

●合唱団：八千代少年少女合唱団
(指揮：長岡亜里奈)
おうたや
(指揮：田中エミ)
ユースクワイア アルデバラン
Youth Choir Aldebaran
(指揮：佐藤洋人)

●合唱ワークショップ(セミナー終了後)
講師：瑞慶覧尚子

●お問い合わせ：
株式会社教育芸術社
スプリングセミナー実行委員会
TEL 03-3957-1168
FAX 03-3957-1740
<https://www.kyogei.co.jp/spring-seminar/>



最新情報は弊社ウェブサイトで
随時公開いたします。
<https://www.kyogei.co.jp/spring-seminar/>



最新情報は、スプリングセミナーの
Facebookでも発信いたします。
<https://fb.me/kgsspringseminar/>

内容は予告なしに変更となる場合がございます。

詳細は
こちら



編集後記

『Vent (音楽教育ヴァン)』は60冊目という節目を迎えました。あらためて60冊を並べて読んでみると、これまでにご協力くださった多くの方々の、多大なるお力添えがあったことを実感し、ただただ感謝する時間が過ぎていくばかりです。

さて、今号では創刊60号を記念して、この「60」という数にちなんだ企画「60につながるカルチャーの旅——ロックとメディア、そして学び」を組みました。ビートルズ来日から60年を経て、ポピュラー音楽はどのような社会的背景の中で、私たちの生活に浸透したのでしょうか。3名の識者に考察していただきました。

巻頭インタビューにご登壇いただいたのは、令和7年度近畿音楽教育研究大会の記念講演で登壇された平田オリザ先生です。平田先生が学長を務めておられる大学内の劇場施設も案内していただき、お話とともに興味深く楽しい取材となりました。

お忙しい中、取材や執筆、編集にご協力を賜りました全ての方に、心より厚く御礼申し上げます。今後ともご支援くださいますよう、お願い申し上げます。

表紙・巻頭イラストレーション
たかなかな

写真撮影
速水 亨

写真・画像提供
アフロ
フジオ・プロダクション
藤原道山

イラストレーション
小倉マユコ

表紙デザイン・本文組版
STORK

音楽教育 ヴァン



発行者 株式会社 教育芸術社
(代表者 市川かおり)
〒171-0051 東京都豊島区長崎1-12-14
TEL. 03-3957-1175(代)
FAX. 03-3957-1174
https://www.kyogei.co.jp/
©2026 by KYOGEI Music Publishers. ©-26
本書を無断で複写・複製することは著作権法で禁じられています。

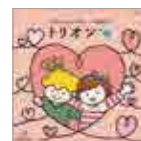
*ヴァン=“vent”はフランス語で「風」。
新しい音楽教育の地平を切り開いていく
願いを込めています。



Recommend

小学生のための合唱パート練習用CD トリオン13・14

- 合唱のパート別の歌とカラピアノが収録されているので、伴奏者がいなくても簡単に音取りができます。
- 収録曲(トリオン13): #みんなで歌おう～歌声と幸せがあふれますように／いい日にしようね／ハートのアンテナ／手をつなごう～共に生きる～／群青／虹
- 収録曲(トリオン14): このみち／夕焼けの心／365日の紙飛行機／HANABI／フェニックス／帰る場所
- 各価格3,300円(本体3,000円+税10%)
- トリオン13: KGO-1217 ●トリオン14: KGO-1218



2026年3月
発売予定

同声合唱曲集 ことばを追いついて

宮本益光 作詞／三宅悠太 作曲

- 「スプリングセミナー2023」での『ことばを追いついて』の初演をきっかけに、宮本益光さん書き下ろしの詩から生まれた同声合唱曲集です。
- 収録曲: ことばを追いついて(同二)／誰か一人を救っても(同三)／みんな みんな(同三)／君が信じる番(同三)
- 定価1,980円(本体1,800円+税10%)／A4判／40ページ
- ISBN978-4-86779-123-3



2026年春
発売予定

クラス合唱用 MY SONG 8訂版

- 定番曲から新曲まで、魅力的なラインナップを収録しました(全63曲)。
- 難易度や対応する「ONTA」の情報、各曲の解説など、選曲に役立つ情報を目次に掲載しています。
- 定価870円(本体791円+税10%)／B5判／360ページ
- ISBN978-4-86779-112-7



準拠CD(別売り)

- 上巻: 価格9,240円(本体8,400円+税10%)／4枚組
- GES-16144～16147
- 下巻: 価格9,240円(本体8,400円+税10%)／4枚組
- GES-16148～16151



Chorus ONTA Vol.30

- 授業に、音楽会に、コンクールに、さまざまな合唱活動で高い評価をいただいている混声合唱のためのパート練習用CD第30弾です。
- Vol.30発売記念ボーナストラック『名づけられた葉』の新録音を収録しました。
- 収録曲: 群青(混三)／群青(混四)／越えてゆけ／空色の日々／眩しく光る歌／心の声／一輪の花／Amazing Grace／Edelweiss／Ave Maria／すべてのもの／いにしへの道／僕らはいきものだから／名づけられた葉(飯沼信義 作曲)
- 価格13,200円(本体12,000円+税10%)／4枚組
- KGO-1213～1216



2026年
1月下旬
発売予定

小学校音楽科での実践事例集

わらべうたと遊びで学ぶ音楽

藤山和可 著

- わらべうたを歌いながら遊ぶ活動を通して、音楽の基礎的な力の育成を目指します。
- 全13曲を掲載。全曲に遊び方が分かる動画が付いています。
- 定価1,650円(本体1,500円+税10%)／A4判／32ページ
- ISBN978-4-86779-128-8



3訂版 ポケットいっぱいのうた

実践 子どものうた 簡単に弾ける162選

鈴木恵津子 編著

- 幼稚園教諭・保育士・小学校教諭養成及び福祉系課程の教材として最適です。使い勝手抜群の簡易伴奏(162曲中141曲)を中心に構成しました。小学校音楽科の歌唱共通教材も全曲収録。
- 定価2,530円(本体2,300円+税10%)／B5判／208ページ
- ISBN978-4-86779-111-0



小学校・中学校・高等学校教科書訂正のお知らせ



教科書及び指導書の訂正を当社ウェブサイトに掲載しています。誠に恐れ入りますが、ご確認のうえ、ご指導の際にはご留意くださいますようお願い申し上げます。

教育芸術社 LINE公式アカウント



ぜひお友だち登録
してください♪